巨匠オリバー・ストーン 富山で語る

歴史と向き合い未来築こう

アカデミー賞を3度受賞した映画界の巨匠、オリバー・ストーン氏を米国から招き、戦争や富山大空襲について共に考えるイベント「Think＆Imagine オリバー・ストーンと考える未来の富山」が8月12日、富山国際会議場（富山市）で開かれました。アメリカン大学歴史学部教授のピーター・カズニック氏を交え、映画脚本家のマイケル・ゴザード氏（同市在住）を進行役にパネルディスカッションが行われ、ストーン氏は戦争という国家の行為を痛烈に批判し「素晴らしい未来を築くため、歴史の教訓に学ぶことが大切」と強調しました。ベトナム戦争を描いたストーン氏の代表作「プラトーン」も上映され、市民は平和の誓いを新たにしました。

記念パネルディスカッション

富山大空襲

■富山大空襲は8月2日午前0時36分に始まった。米軍の「B29」174機が同2時27分までの間に50万発以上の焼夷弾を富山市街地へ投下した。中心部は焼き尽くされ、2700人以上が亡くなった。

ゴザード　お二人の共著『オリバー・ストーンが語る　もうひとつのアメリカ史』で、富山大空襲についての記述があります。「99・5％の市街が焼き尽くされた」とあり、その数字には私も本当に驚きました。なぜ富山大空襲を取り上げようと思われたのでしょうか。

カズニック　99・5％という数字は米空軍が発表したものです。1945年の夏までに、日本では重要な都市の拠点がなくなるほどの空襲が行われました。地方都市や小規模な都市も

オリバー・ストーン氏

1946年、ニューヨーク生まれ。監督、脚本家、プロデューサーとして映画、ドキュメンタリーなど、これまで20作品以上の長編映画を手掛ける。「ニクソン」（95年）、「ブッシュ」（2008年）など現代アメリカ史を多く扱う。

原爆投下は「戦争犯罪」 ストーン氏

含め100箇所以上の都市が対象になったとされています。そして、富山に関しては、最も大きな被害が出た地方都市ということになります。

ストーン　問題なのは広島、長崎への原爆投下が米国の政治的な行動だったということです。旧ソ連が旧満州に侵攻したことに対し、警告を与えるために原爆を投下しました。

ゴザード　私は祖父から「原爆投下は戦争終結のために仕方がなかったこと」と聞きました。しかし、ストーン監督はそうではないと発言しています。

ストーン　原爆投下によって、米軍兵士100万人の命が救われたといわれています。日本本土に上陸すれば、多くの米兵も犠牲になっていたということですね。しかし、当時の日本は既に食料不足で、空軍力もありませんでした。米兵の命が救われたという主張は間違いだと考えています。これは完全な「戦争犯罪」です。アフガニスタン、イラク、リビア、シリアでも同じ口実で米国は軍事行動をとってきました。これを受け入れてはいけません。

地方都市で最大の被害 カズニック氏

カズニック　富山への空襲も8月2日未明という、「日本が無条件降伏を受け入れるのではないか」と考えられていた時期に行われました。富山の市街地から約8㌔離れた場所にある、軍需工場を攻撃するという案はあったようです。しかし、最終的には焼夷弾を用いて、都市全体を焼き尽くし、たくさんの民間人が殺害されたのです。

ゴザード　歴史が教師であるとすれば、どのような教訓となるのでしょうか。

カズニック　現在、広島や長崎への原爆投下などについて、日本のメディアは取り上げています。一方で、日本が行った戦争犯罪はあまり取り上げません。私は、自国の過去を批判的に見ていく必要があると考えています。そうすることで教訓を学び取って、素晴らしい未来を築けることでしょう。過去を忘れてしまうと、それを繰り返す危険があります。

ストーン　日本の子どもたちは、日本の最も暗い歴史の部分を知りません。東アジア、東南アジアの国々での戦争犯罪を教育の中に取り入れているわけではありませんから。私はその事にも衝撃を受けています。日本だけでなく米国やフランス、ロシアでも同じような問題があります。

カズニック　その上で、日本は核兵器根絶のリーダーになる必要があると考えています。日本は唯一の被爆国であり、戦争において意図的に原爆を投下された国です。日本の人々、そして富山の人々には特別な責任があると思います。それは皆さんの経験、富山や広島、長崎の経験をメッセージとして、世界に伝えなければいけないということです。平和な世界をつくるというメッセージです。現在の米国は、そういった面で前向きな役割を果たしてはいません。私もオリバーも、日本は平和を希求する活動をすべきだと考えています。

主催者代表あいさつ

北日本新聞社長　忠田　憲美

富山大空襲から73年を経た8月に社会派映画の巨匠、オリバー・ストーン監督とアメリカン大学教授で歴史学者のピーター・カズニック氏を富山市にお迎えすることができました。

ストーン監督とカズニック教授はこれまでに広島・長崎を直接訪問し、原爆投下後の惨状や被爆者の声に耳を傾けてきました。米国内ではびこる「原爆の投下が太平洋戦争を収束させた」とする〝原爆神話〟を否定し、戦争の残虐性や平和の大切さを訴えています。その中で、富山大空襲による富山市の被害についても度々言及されています。

富山大空襲は1945年8月2日未明に今、私たちがいる会場周辺が米軍の標的となり、市街地の99・5％を焼き尽くす地方都市最大の戦禍となりました。8月は富山にとって鎮魂の祈りを捧げ、空襲被害について語り継ぎ、平和の尊さを考える大切な時です。

米国からお招きした両氏からのメッセージ、市民の皆さまとの語らいの時間が復興を遂げたふるさとの未来、これからの平和にとって実り多きものとなることを願っています。

映画と平和

■ストーン氏の代表作「プラトーン」（1986年）はベトナム戦争（73年に米軍撤兵、75年終結）でのストーン氏自身の従軍体験に基づく映画で、87年のアカデミー賞作品賞に輝いている。作品では戦場の悲惨さと兵士たちの赤裸々な姿を描いた。

ストーン　私は士官ではなく、一等兵として戦争に参加しました。最初に脚本を書いたのは76年。内容の50％は、私の経験を基に書いています。当初、「あまりに現実的すぎる」と却下され、何度も書き直したのを思い出します。

カズニック　付け加えると、ストーンはエール大学の学生でした。育った家は保守的で、ベトナム戦争を支持していました。ストーンはエール大学を中退し、ベトナム戦争に参加したのです。

平和の尊さについて語り合うストーン氏（中央）とカズニック氏（右）

「プラトーン」現実に肉薄 カズニック氏

ピーター・カズニック氏

1948年、ニューヨーク生まれ。アメリカン大歴史学部教授。広島・長崎の原爆投下や第二次世界大戦などを研究。95年から毎年、同大の学生らを広島と長崎に引率し、被爆者から証言を聞くセミナーなどを開催している。

ストーン　映画の撮影はフィリピンのジャングルで行いました。当時のフィリピンは政局など国内情勢が混乱状態だったがゆえに、撮影が許可されたのでしょう。86年12月に「プラトーン」が公開された際、上映した映画館は6館でした。配給会社は（映画の内容に）おびえ、幅広い公開に踏み切れなかったわけです。そこから2～3カ月のうちに人気を博し、米国だけでも興行収入1億2千万㌦の大ヒットを記録し、アカデミー賞作品賞を受賞するに至りました。

カズニック　オリバーにとって個人的な映画であり、だからこそ力強い映画なのかもしれませんね。戦争映画の中で「最も現実に肉薄した」と、退役軍人の方々も評価しています。兵士の感情も見事に描かれており、さらに背景を理解することで、この映画がいかに力強いものか、ご理解いただけるかと思います。

マイケル・ゴザード氏

「米国 変わってしまった」 ストーン氏

■ストーン氏脚本・監督のミステリー映画「JFK」（91年）はJ・F・ケネディ大統領暗殺事件を題材に、捜査に執念を燃やす検察官の姿を描いた。同映画は翌年のアカデミー賞で撮影賞と編集賞を受賞した。最新の監督作「スノーデン」（2016年）では、アメリカ国家安全保障局を舞台に、専門家が機密情報をメディアに暴露した事件の詳細を追った。

ゴザード　トランプ米大統領は、ケネディ大統領暗殺関連の非公開文書について全面公開を指示していましたが、今年は見送られました。

ストーン　全体像は分からないと思います。例えば弾道検査や解剖結果、警察の対応を含め、これらはすべて隠ぺいされており、公開されるには権力に対し、人々が一致団結しデモなどを行うしかありません。

ゴザード　「スノーデン」を鑑賞し、驚いたのは、スノーデン氏は米政府がサイバー攻撃するための下準備、いわゆる「ロジック爆弾」を日本のインフラ、通信設備に仕掛けていると指摘している点です。

ストーン　私も本当に驚きました。スノーデン氏に確かめたところ、「当たり前だ」という顔をしてこういった内容を話しました。日本に対してだけでなく、多くの国に対して行ってきたのだと。

ゴザード　現在のような映画産業の中で、「プラトーン」のような映画は作れますか。

ストーン　いいえ、米国では作れないと思います。（米同時多発テロが起きた）2001年以降、米国は変わってしまいました。より愛国的な国、軍を愛する国になったようです。「プラトーン」のようなベトナム戦争を批判する映画、「JFK」のように政府を批判する映画は難しいですね。

ゴザード　「プラトーン」のメッセージとは何でしょうか。本日のパネルディスカッションの内容を踏まえ、私たちが生かせるものはありますか。

ストーン　「メッセージは何か」と聞かれるのは苦手でして……。それは皆さんに決めていただきたい。そうでなければ、「何を考えるべきか」と私が決めることになってしまいます。そういうことではないのです。ただ、私の作品のすべてに、戦争と平和という課題があります。映画では人生について、生きることについて描きたいと思っています。

登壇者

オリバー・ストーン氏（映画監督）

ピーター・カズニック氏（アメリカン大学歴史学部教授）

司会

マイケル・ゴザード氏（映画脚本家）

市民との語らい

公平な世界へ 過去を学ぶ

Q　戦争を知って、伝えることが大事だと分かりましたが、私たち若い世代は戦争を知る機会が少ないと心配しています。

カズニック　自身の歴史を知らないと、この世界があるのが当たり前だと思ってしまいがちです。別の未来があったかもしれないことに考えが及ばないということです。歴史を知れば、どうしてそうなったのか、分かると思います。歴史を学ぶことで、より公平、より平等、より平和な世界をつくることができるはずです。私たち二人は、そういう主張ができると信じ、「嘘を暴き、神話を暴く」といった活動を行っています。直面した歴史に、誠実に向き合わないと未来を変えることはできません。未来を変えて、悲惨な過去が繰り返されないようにしないといけません。

大学生からの問い掛けに答えるストーン氏ら

Q　テクノロジーが発展し、世の中が便利になるのを恐れる気持ちがあります。心が豊かでなくなり、欲におぼれる人が増える一方ではないでしょうか。これ以上の技術発展は、平和につながると思いますか。

ストーン　ドラマは、善と悪の間の対立から生まれる側面もあります。私たちの中には良い部分があり、それをきちんと引き出して、発達させられる人はいます。一部には成長しない、変わらない人もいるのでしょうね。ぜひ、自らの心を進化させてください。私は今も学び続けています。きちんと耳を傾けることが、私も徐々にできるようになりました。質問者の方はまだ先が長い。もっと好奇心を持ってください。一つの答えを提示されたからと、それをうのみにしないでください。二つ目、三つ目の答えを求めていってください。

Q　富山市出身の大学生です。小学校の頃、富山大空襲や戦争のことで教わったのは「○○年に起きた」という史実だけでした。日本の受験教育が原因だと感じています。民主主義の中で、教育はどうあるべきでしょうか。

カズニック　民主主義が成功するには、国民が知識を持ち、関心を持った上で、教育を受ける必要があります。私たち教養のある者、映画監督や学者などは、過去の正確な史実を伝えることが大切です。これは、日本の皆さんにも実行してもらう必要があるでしょう。

ストーン氏らに質問する参加者

Q　ストーン監督の好きな言葉、モットーは。

ストーン　それを書き出して、壁に貼ってもらったとすれば、60から70くらい貼り出さないといけないですね。常に変わっています。

富山大空襲の惨禍を乗り越え、富山市はコンパクトシティー政策を軸に発展し続ける。未来へ向けたまちづくりを進める森市長が、ストーン監督や平和への思いを語った。

—ストーン監督の作品について印象を聞かせてほしい。

「プラトーン」のイメージが強いが、私にはトム・クルーズが主演した「7月4日に生まれて」の方が印象的だ。アメリカの独立記念日という特別な日に生を受けた主人公がベトナム戦争から帰還し、葛藤しながら反戦運動に身を投じる姿を描いていた。作品の背景には、独立戦争を経てアメリカ人自ら建国したという歴史と思いがあるだろう。彼らは多民族・多文化国家だからこそ、国民が共有できる歴史と理想をつくった。今、トランプ大統領が登場し、その普遍的な価値観をひっくり返している。あらためてストーン監督の作品を興味深く思っている。

平和への思い　森雅志富山市長

戦争の本質 語り継いで

—そのストーン監督が富山を訪れた。どんなことを感じてもらいたいか。

富山大空襲によって、富山市に歴史的な建築物がほとんど残っていないということに気付けば、戦争の災禍の大きさを感じてもらえると思う。原爆を落とされた広島、長崎を除き地方都市で最大級の被害を受けた。日本も中国を空襲しているが、これほど面的に大規模な被害を与えたというのは戦争犯罪に近い。

そんな中で戦後の富山はダイナミックに復興した。非常にパワフルな取り組みが行われた。富山市のように碁盤の目のように大きな道路が整備されている街は全国的にも珍しい。これは住民の協力がないとできなかった。

富山の人はおとなしいけれど、昔から時々そういうことをやる。配置薬は江戸時代にまでさかのぼることができ、全国各地に富山の薬を売り広めた。北洋漁業の歴史も古い。カムチャッカ半島の根元に拠点となる村まであった。富山市であれば、戦前には新たに開削した富岩運河の土を使って、蛇行していた神通川の旧流路を埋め立てた。そして市街地の中心ができた。これが富山市をつくった第1の都市計画。第2の都市計画は戦後復興だろう。そういった富山人の粘り強さと進取の精神を感じてもらいたい。

—都市計画というと、2020年3月に路面電車の南北接続が実現する。

公共交通を軸としたコンパクトシティーは富山市にとって第3の都市計画。人口減少や超高齢化社会を見据えてやってきた。車社会だった富山市のまちづくりを変え、富山市民の暮らしの質を上げ、都市格を高める。南北接続でコンパクトシティー政策が一定程度達成されると言える。地価も順調に推移しており、民間の投資も活発になった。税収が上がり、郊外居住の住民にも資するはずだ。

—富山市が発展する中で、戦争の記憶が薄れていく。災禍をどう語り継ぐべきか。

非常に難しいことだと思う。広島や長崎の原爆、富山をはじめとした空襲について惨禍を語ることは確かに大切なことだ。ただもう一歩踏み込み、なぜ人は戦争をするのか、どうして止められないのか。戦争とは一体何なのか。そういったことを語ることができる大人を育てないといけない。未来に語り継ぐべきは惨禍だけではないはずだ。